

江戸時代の社会

教科書記載の資料を有効活用した授業例…身近な地域の事例への展開も視野に入れて

東京都世田谷区立弦巻中学校 安齋正則

1 本単元について

本単元は、江戸時代の産業、交通の発達を扱うところである。戦乱の世からやがて江戸幕府による支配が確立し、世の中が安定すると、幕府や藩は年貢を増やそうとし、農民は工夫して生産を伸ばしたり、収入を増やそうとして農業や手工業が発達する。それにつれて交通の発達や商人の成長、都市の発達を促す。産業の発達は、一面ではそのひずみから貧富の差が拡大し、やがて百姓一揆の

多発として表れ、江戸時代後期の社会変化の背景となる。また一方、産業、交通の発達はやがて、経済力をつける町人が中心となって担う文化の発達の背景ともなる。

このようにこの単元をしっかりと学習させることが、この後の歴史を把握するための基礎となるので、重要なところである。

以上のような構えで本単元の授業構成を行ったが、ここで留意した点は、具体的な事例を選んだ内容構成し、網羅的な取り扱いにならないよう



帝国書院『中学生の歴史ワーク・上巻』p.51

にした点である。特に本単元は、身近な地域の特色を生かして具体的な事例を取り上げるのに適した単元である。そこで身近な地域の事例を選び、資料の活用を取り入れて学習させることにした。

ただし、ここでは教科書に記載されている資料を「中学生の歴史ワーク-資料で学ぶ-（上巻）」（帝国書院発行）を使用して、効果的に活用した授業展開例を示していく。教科書記載の資料は、必ずしもすべての学校で身近な地域とはならないが、その資料活用の展開例は、それぞれの学校で身近な地域の事例を取り上げて授業を行う際にも応用ができるからである。

◎単元の指導計画（2時間構成）

第1時 新田開発と産業の発達…本時

第2時 交通と都市の発達

2 授業展開例（新田開発と産業の発達）

(1) 新田開発…椿湖の干拓を例として

教科書p.118①②の地図を見て、なぜ椿湖がな

くなっているのか考えさせ、ワークの記述欄に記入させる。農業の進歩については、資料に基づいて具体的な例を把握させて実感させたい。ここでは、干拓による新田開発で、幕府や藩が年貢増収を図ったことを把握させるのがねらいである。椿湖（海）は、17世紀後半に干拓され、干潟八万石と呼ばれる新田になったところである。なお、②地図中の左側の両総用水と右側の大利根用水はともに第二次世界大戦後に完成した用水路で、江戸時代の普請ではないことに注意する。

次に教科書p.93から、ほかの地域での新田開発のようすをノートにまとめさせ、椿湖の干拓と比較・関連づけさせ、当時の新田開発の特色をつかませる。

新田開発が、特に17～18世紀にかけて全国で盛んに行われていたこと、その結果、米の生産が大幅に増えて、幕府・藩の年貢収入が増えたことを理解させることによって、椿湖の干拓による新田開発という一つの具体的な事例を、日本全体の中

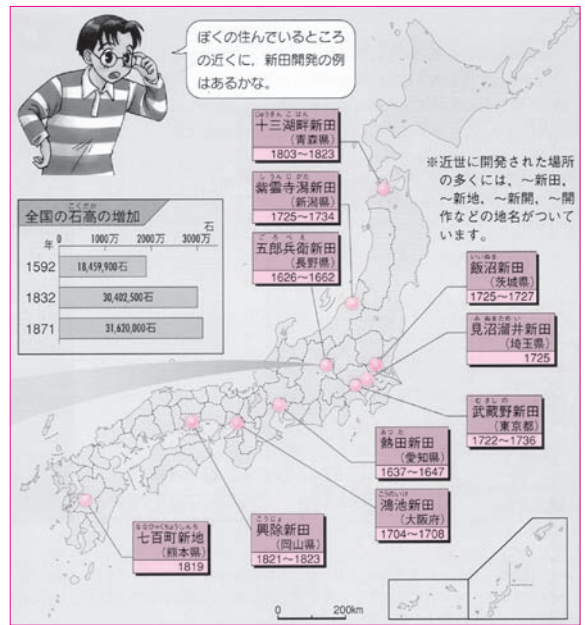
で意味づけさせることができる。

このように教科書の資料で扱う事例は、他地域の事例を扱う際の基本として、発展・応用が可能である。新田開発は多くの地域で行っており、身近な地域ではどうだったのか、という課題解決的な学習へとつなげることができる。

(2) 農作業、農具の工夫

教科書p.96～97の「米の収穫を体験してみよう」の写真を見て、江戸時代の農民が農作業や農具でどのような工夫をしたのかノートに書かせて、実感させる。ここでは、農業（技術）の発達を年貢を納める農民の側からつかませるのである。

この展開でもさまざまに応用ができ、発展課題へとつなげることができる。江戸時代から伝わる農具は、直接手にして体験することもできるので、そのような機会が可能であれば、直接体験することを課題とすることもできる。



帝国書院『中学生の歴史（最新版）』p.93



帝国書院『中学生の歴史ワーク・上巻』p.51

また、ほかにどのような工夫をして農業を発展させたのか、課題を与えて調べさせる展開もある。

農作業、農具の工夫を把握させた上で、教科書p.96①の「農家の家のようす」やp.97⑭⑮の「食事のしたく」の体験写真から気がついたことをノートに書かせて、当時の農民の生活を想像させる。ここでは、各地に残る江戸時代の古民家を利用して、身近な地域の農民の生活のようすを取り上げることもできる。

(3) 商品作物の栽培…綿花の栽培から綿織物になるまでの過程を例として教科書p.118・119③の「綿を栽培する農家のようす」を見て、Lookの作業を行う。

ここでは、綿花の栽培が糸繰り、機織り、染色を経て商品として売れることを捉えさせるのがね

らいである。

次に、教科書p.119の「作兵衛の話」「良作の話」のコラムを読み、綿花や染色の原料である藍の栽培がよい現金収入になることをとらえさせ、④の地図でその生産地を確認させる。

その上で、ほかにどこでどのような特産物が生産されていたのか、⑤の「各地の特産物」の表を見て、地図帳で場所を確認させ、気づいたことをノートに書かせる。

ここでは、商品作物の栽培や手工業が全国各地で盛んになったことをとらえさせることによって、遠州での綿花栽培や阿波での藍栽培という一つの具体的な事例を、日本全体の中で意味づけさせることができる。

また、特産物の増加が、それを扱う商人の成長や、交通・通信、都市の発達につながることも気づかせる。

ここでの発展・応用例もさまざまに考えられる。まず、綿花栽培に関連して、教科書p.77の「木綿」のコラムを読んで、綿花栽培の歩みを東アジアとの関連や農民の工夫の中でとらえさせることもできる。

綿織物づくりに関しては、教科書p.97⑫⑬の「機織り」体験写真から気がついたことをノートに書かせて、当時の農民の夜なべ仕事を想像させることもできるし、機会があれば、機織りも直接体験ができる。



帝国書院『中学生の歴史（最新版）』p.97

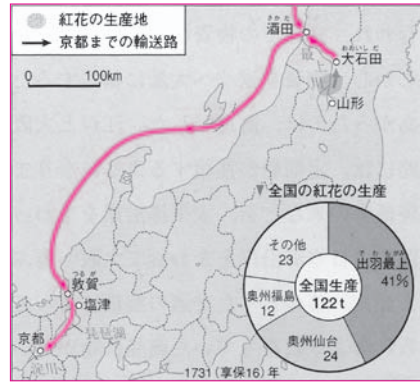
また、身近な地域の特産物の歴史を調べて発表するという課題を設けることもできる。その特産物の中には、現在まで伝わっているものも多くあるので、農具と同じように、直接手にとって見ることや生産過程の見学、またその生産過程の作業体験までも機会があれば可能である。

さらに、教科書p.122～123の「豪商の暮らし～山形県酒田市～」から、染料の原料の一つである



『わたしたちの世田谷』（世田谷区教育委員会）

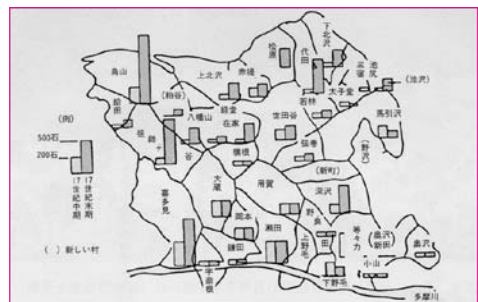
紅花がどこで生産され、どのように運ばれるか、またそれを扱っている商人（酒田の豪商）はどのような暮らしをしていたのかをとらえる、という授業展開も可能である。しかし、このページを扱う場合は、時間の関係もあって次の時間に回し、必要な時間をかけた方がよいだろう。



帝国書院『中学生の歴史（最新版）』p.122

3 身近な地域の歴史との関連

今回示した授業展開例は、通史の中の一つの単位として扱うことを前提としている。ところが、この単位は特に身近な地域での具体的な歴史的事象や資料が多くある可能性が高い。生徒が調べる活動を行いながら、生活の中に息づく身近な歴史を実感するのにふさわしい題材があるのなら、少し時間をとって、課題を設けて調べて、発表する学習を展開するのがよいだろう。



『わたしたちの世田谷』（世田谷区教育委員会）

地元には郷土資料館、歴史博物館や古民家などがあれば、そこと連携をとって見学を取り入れたり、資料収集に利用して授業展開する。また、江戸時代からの伝統産業、工芸、特産物が息づいているのなら、それを利用しての授業展開が考えられる。いずれにしろ、ダイナミックな授業展開が期待できる単位ではある。